

小学生における友人サポート、学級機能といじめ加害傾向の関係

久米 瑛莉乃・田中 宏二・橋本 翠

本研究は、”友人サポート”が”学級機能”を媒介にして”いじめ加害傾向”に関連するという仮説に基づいて、それら要因間の関連について実証的に検討することを目的とした。質問紙は、友人サポート尺度、学級機能尺度、いじめ加害傾向尺度から構成され、小学校5・6年生(242名)を対象に調査を実施した。共分散構造分析は、”友人サポート”、”学級機能”、”いじめ加害傾向”の3つの潜在変数間の関連をモデル化し実施した。その結果、”友人サポート”が”学級機能”を媒介にして”いじめ加害傾向”に関連していることが示された。このことから、いじめ加害傾向を抑制するためには、友人サポートを活性化させること、そして学級が上手く機能していくように働きかけることが重要であることが示唆された。今後の課題は、それぞれの変数間の因果関係を詳細に捉えるためにも縦断的研究を通して検討することである。

キーワード

Support from friends 友人サポート, Class functions 学級機能,
Tendency to bully いじめ加害傾向, Elementary school students 小学生

所属

広島文化学園大学大学院 Hiroshima Bunka Gakuen University
教育学研究科 Graduate School of Education

I 問題と目的

小学校におけるいじめの認知件数は、平成27年度に初めて15万件を超え(文部科学省¹⁾)、いじめの問題への深刻さが増している。また、いじめは、学校不適應や不登校、友人関係に不安や懸念を抱えることや自尊感情の低下(中井・庄司・清水²⁾;三島³⁾;原田⁴⁾;熊谷・杉山⁵⁾)など、健康面において様々な悪影響を与えることが明らかにされている。これらの点からも、いじめ問題への早急な対応・対策が喫緊の課題となっている。

いじめ場面には、加害者、被害者、観衆、傍

観者の4者が存在する(森田・清永⁶⁾)。この4者はいつも固定的でなく被害者が加害者に、加害者が被害者になることや傍観者が加害者になるなどの立場の入れ替わりが起ることも言われている。(国立教育政策研究所⁷⁾⁸⁾;平岩⁹⁾)。このことから、いじめは誰にでも起こりうる可能性があると言え、これら4者のいずれにもならないための要因について考えることは重要な課題である。これら4者のいずれにもならないための要因について考える時、4者いずれの立場に置かれる場合においても、その個人要因に焦点が当たりがちである。しかし、小学校



におけるいじめ場面は、学級という集団の中で起こっているため、個人を取り巻く集団要因にも焦点を当てることは重要である。小学校におけるいじめ場面を想定した場合、考えられる集団要因として友人サポートや学級機能が挙げられる。

友人サポートは、サポート源を友人とするソーシャルサポートの一つであり、ある個人を取り巻く様々な人々からの有形・無形の資源の提供のことであると定義されている（小川¹⁰⁾）。また、学級機能については、「子どもの主体性を尊重した教師のかかわり」、「所属感・有能感」、「集団凝集性」の3因子が学級を機能させる要素であることを見出し、それを学級機能と定義し、学級機能尺度を作成している（松崎¹¹⁾）。

本研究では、これに準じて友人サポートと学級機能の概念を扱う。

学級は児童にとって、学校での大切な居場所であり、困ったときに支え合える友人からのサポートが学級の中にあることは、学級機能が良好である状態を維持するためには、重要な要因となることが考えられる。中原¹²⁾は、所属する集団において自己がその環境で受容され、他者からの承認を得ることができた時に自己の存在を確認することができるとしている。これは友人の受容的な態度が情緒的サポートとなり、所属感・有能感を得るという木下¹³⁾の意見と合致する。また、越¹⁴⁾は、中学生を対象に学級に対するコミュニティ感覚（学級において、情緒的なつながりを感じながら、自分たちの互恵的關係によって、課題を共有しお互いのニーズを統合的に達成しているという感覚）とソーシャルサポートの授受を指標とした学級全体との相互作用との関連を検討している。その結果、コミュニティ感覚の高い学級では「クラスの居心地をよくするために、みんなと一緒に活動し

ようという気持ちがある」といった、協同的積極性が、友人からのサポートの提供と関連することを示している。つまり、協同的積極性を高めることで、学級の集団凝集性も高まり、友人サポートの活性化に繋がると考えることが可能である。また、級友からのサポートは、孤立感の低減や帰属感の増加と関連する（小嶋・宮川・佐藤¹⁵⁾）ことも示されており、友人サポートが存在することで、学級機能に良い影響を与える可能性があることを示唆している。

小学校におけるいじめの生起要因の一つとして、児童は一日の大半を同じ学級に所属する成員と過ごすこととなるため、学級に所属する成員間でのトラブルが多いと考えられる。また、いじめの被害者と加害者の関係については、「同じ学年で同じクラスの子」にいじめられたとする割合が多数を占める（森田・秦・若井・滝・星野¹⁶⁾）ことも示されており、集団要因である学級内での友人関係が、個人要因であるいじめ加害傾向と関連している可能性は十分考えられる。

我が国では、学級が閉鎖的で児童同士のかかわりが密接になるため、学級の雰囲気などがいじめの発生を左右し、いじめの許容空間となる傾向が非常に高くなることが考えられる。そのため、学級の雰囲気を良くし、仲間支援活動などを活用し友人と交流する機会を積極的につくり、学級という共同体を安心感があり居心地のよい集団にしていくことがいじめの発生を抑止することにもつながる（池島¹⁷⁾）。また、集団がうまく機能するための学級内でのルールや仕組みがあること、教師と児童や児童同士の相互承認・相互サポートがうまくいっているクラスでは、いじめなどの心の闇の問題が生じにくい（杉森¹⁸⁾）とされている。一方、いじめ加害者の特徴として、学校生活での友人関係は良好であるが、対人面での攻撃性が強く自尊感情が



高い(本間¹⁹⁾)傾向があることを示している。さらに戸田²⁰⁾は、大学生のいじめ経験に関して調査を行った結果、いじめ場面で自分がとった行動に対して、約6割が「友達から支持されている」と思っていたと回答した。しかし、実際は、支持していたのではなく、いじめ場面において「悪いこと」と分かっているにもかかわらず、加害者に対して注意ができない傍観者や観衆であり、加害者は、自分が行っているいじめが許容されていると思込んでいるに過ぎない。このように、意図されない友人サポートをサポートされていると加害者は認識し、いじめをエスカレートさせていく場合もいじめ場面においては少なからず存在していることが伺える。

これらの研究から、集団要因である友人サポートがどのように働くかにより、学級機能にも影響を与えることは推測可能である。しかし、そこに個人要因としてのいじめ加害傾向がどのように関連しているのかについては、上記の研究からのみでは明確にはされていない。友人サポートや学級機能といった集団要因が個人要因であるいじめ加害傾向とどのような関連性を持つのかを探ることで、いじめ場面を構成する4者のいずれにもならない要因を明らかにする方策を示せるかもしれない。

そこで本研究では、友人サポートが学級機能を媒介し、いじめ加害傾向に関連するという仮説を設定し、実証的に検討することを目的とする(図1)。

II. 方法

1. 調査対象者と調査時期

本調査は広島市内の公立小学校2校10学級の第5・6年生を対象に2015年1月上旬～1月中旬にかけて実施した。調査対象者の内訳を表1に示す。

2. 手続き

無記名自記式質問紙を用いて実施した。学級

担任から児童に質問紙を配布し、児童は質問紙



図1 本研究の分析枠組み

を自宅には持ち帰らず、学級の全員(欠席者は除く)が同じ時間に回答するよう求め、学級担任が回収した。分析対象は242名(男子134名、女子108名)であった。

3. 調査内容

本研究で使用された尺度は以下のものである。

1) 友人サポート尺度

細田・田嶋²¹⁾の中学生用ソーシャル・サポート尺度15項目のうち、評定者の負担を考慮し、因子負荷量が.50以上の13項目を使用した。削除した項目は、「病気やケガのときに心配してくれる」及び「悩みごとについて話し合う」の2項目である。探索的因子分析を行った結果、原尺度と同様の3因子構成になったため友人サポート尺度として使用した。各下位尺度は、「おしゃべりをしたり、じょうだんを言い合ったりして過ごす」などの「共行動サポート」の5項目、「何か困っているときに、アドバイスをくれる」などの「道具的サポート」の4項目、「あなたに何かうれしいことがあったときに、自分のことのように喜んでくれる。」などの「情緒的サポート」4項目の3下位尺度、13項目から構成され、Cronbachの α 係数は0.785, 0.833, 0.877であり、内的整合性による高い信頼性が確認された(久米・田中²²⁾)。「以下

表1 調査対象者の内訳

	A小学校						B小学校			計	
	学級数	男子	女子	学級数	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
第5学年	2	20	23	3	42	36	62	59			
第6学年	2	30	22	3	42	27	72	49			
計	4	50	45	6	84	63	134	108			

に書かれている内容がクラスの友人とあなたと



の間で、普段どのくらいありますか」とし、「まったくない (1点)」、「あまりない (2点)」、「わりとある (3点)」、「よくある (4点)」の4件法で回答を求めた。なお、本研究ではサポート源をクラスの友人に限定した。岡安・由地・高山²³⁾の児童用メンタルヘルス・チェックリストや、嶋田²⁴⁾の小学生版 PHSQ などの小学生用のソーシャル・サポート尺度では、児童はサポートの種類に関して未分化の段階にあるとされ、一次元尺度が用いられている。しかし、細田ら²¹⁾のソーシャル・サポート尺度は中学生を対象としながらも3つの下位尺度や質問内容も小学生に分かりやすく構成されていると判断し用いた。

2) 学級機能尺度

松崎¹¹⁾の小学生を対象とした、学級機能尺度 21 項目中 20 項目を使用した。原尺度の「子どもの主体性を尊重した教師のかかわり」の内、「自主勉強は自分がやりたいことだけやることを先生は認めてくれる」は、自主勉強の言葉の

捉え方 (塾や家庭教師など学校外の勉強を含めるのか、家庭だけでの勉強なのか) が多義的で児童が回答しにくい項目である可能性があったため、あらかじめ質問項目から除外し、20 項目で構成した。各下位尺度は、「何か失敗したときは、次にやるときどうするかについて、先生は考えさせてくれる」などの「子どもの主体性を尊重した教師のかかわり」の 8 項目、「クラスで決める目標や計画について、その話し合いに自分が参加できていると感じる」などの「学級集団への所属感と有能感」の 7 項目、「わたしのクラスは、クラスで何かをするときは、みんな喜んで参加する。」などの「集団凝集性」の 5 項目から構成され、Cronbach の α 係数を算出したところ 0.917, 0.842, 0.835 であり、内的整合性による高い信頼性が確認された (久米・田中²²⁾)。今のクラスについて「そう思わない (1点)」、「ややそう思わない (2点)」、「ややそう思う (3点)」、「そう思う (4点)」の4件法で回答を求めた。

表2 各尺度の記述統計量

		友人サポート尺度			学級機能尺度			いじめ加害傾向	
		共行動サポート	道具的サポート	情緒的サポート	教師のかかわり	所属感・有能感	集団凝集	関係性いじめ	直接的いじめ
全体	平均値	13.62	12.88	12.98	26.21	17.36	16.00	3.48	2.60
(n=242)	標準偏差	2.47	2.71	2.75	5.07	3.75	3.06	1.35	0.92
男子	平均値	13.54	12.63	12.52	25.87	17.65	15.93	3.64	2.58
(n=134)	標準偏差	2.45	2.89	2.84	4.95	3.76	2.90	1.45	0.94
女子	平均値	12.73	13.14	13.60	26.63	17.01	16.10	3.30	2.63
(n=108)	標準偏差	2.51	2.49	2.49	5.21	3.72	3.28	2.63	0.91
	t 値	0.61	1.29	3.23 **	1.16	-1.32	0.44	-2.16 *	0.40

注) t 値 * $p < .05$ ** $p < .01$

表3 友人サポート、学級機能といじめ加害傾向の単相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	
友人サ	1.共行動サポート	—	0.653 **	0.586 **	0.412 **	0.566 **	0.545 **	-0.039	-0.065
ポート尺	2.道具的サポート	0.575 **	—	0.685 **	0.472 **	0.535 **	0.517 **	-0.036	0.010
度	3.情緒的サポート	0.558 **	0.644 **	—	0.566 **	0.579 **	0.600 **	-0.047	-0.140
	4.教師のかかわり	0.137	0.306 **	0.349 **	—	0.576 **	0.745 **	-0.171 *	-0.231 **
学級機能	5.所属感・有能感	0.320 **	0.380 **	0.477 **	0.405 **	—	0.671 **	-0.142	-0.210 *
尺度	6.集団凝集性	0.392 **	0.461 **	0.584 **	0.565 **	0.545 **	—	-0.232 **	-0.195 *
いじめ加害	7.関係性いじめ傾向	-0.234 *	-0.141	-0.190 *	-0.231 *	-0.320 **	-0.326 **	—	0.332 **
傾向尺度	8.直接的いじめ傾向	-0.244 *	-0.234 *	-0.320 **	-0.349 **	-0.252 **	-0.321 **	0.587 **	—

対角線より右上: 男子 (n=134), 対角線より左下: 女子 (n=108)

注) * $p < .05$ ** $p < .01$



3) いじめ加害傾向尺度

大西・吉田²⁵⁾のいじめ場面(物語)を見た
と想定したときに、それぞれ自分が登場人物(加
害者)なら同じことをすると思うか否かを聞き、
加害者行動をとる傾向があるかを測定するいじ
め加害傾向尺度を用いる。いじめ加害傾向尺度
は、関係性いじめ加害傾向2項目と直接的い
じめ加害傾向3項目の2つの下位尺度に分か
れている。大西・吉田²⁵⁾が中学生を対象に作
成した、いじめ加害傾向尺度5項目から、直
接的いじめ加害項目である、ジュースやパンを
おごらせる項目については事例頻度が少ないと
判断し除外し、「Aの遊び仲間のBはとても自
分勝手なので、AはBがだいikiraiです。そ
こで、Aはほかの友達に「Bって自分勝手にいっ
しょに遊んでいても、つまらないよね。今度か
らBが遊びに来てもしょに遊ばないよう

にしよう」と言いました。あなたがAなら、A
と同じようなことをすると思いますか。」など
4項目を使用したCronbachの α 係数を算出し
たところ「関係性いじめ傾向」、「直接的いじめ
傾向」それぞれ0.719, 0.607であり、やや低
いが内的整合性による一定の信頼性が得られた
(久米・田中²²⁾)。評定は「しないと思う(1点)」、
「たぶんしないと思う(2点)」、「たぶんする
と思う(3点)」、「すると思う(4点)」の4件法
で回答を求めた。

統計解析には、IBM SPSS Statistics 23.0
とIBM SPSS Amos 23.0を用いた。

III. 結果

各尺度の記述統計量は、各尺度の下位尺度
得点の合計得点を用いて算出した。t検定の結
果、情緒的サポートは男子より女子の平均値が
有意に高く($p<.01$)、関係性いじめ加害傾向

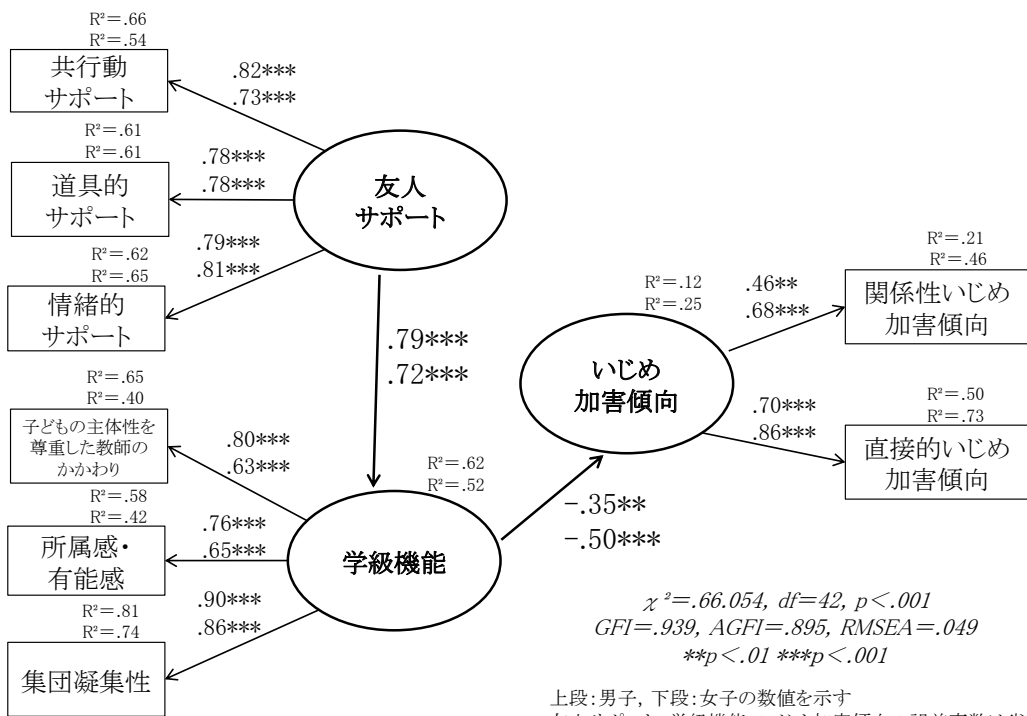


図2 友人サポート、学級機能、いじめ加害傾向間の関連



は女子よりも男子の平均値が有意に高かった ($p < .05$) (表 2)。

1. 尺度間の関連

本研究で使用した友人サポート、学級機能、いじめ加害傾向の下位尺度間の相関係数を表 3 に示す。情緒的サポートと関係性いじめ加害傾向において男女差がみられたため、男女別に算出した。表 3 に示す通り、男子では友人サポート尺度と学級機能尺度、学級機能尺度といじめ加害傾向尺度（所属感・有能感と関係性いじめ加害傾向を除く）の変数間において有意な相関が認められた。しかし、友人サポート尺度といじめ加害傾向尺度の変数間においては有意な相関が認められなかった。一方、女子では友人サポート尺度と学級機能尺度（共行動サポートと主体性を尊重した教師のかかわりを除く）、学級機能尺度といじめ加害傾向尺度、友人サポート尺度といじめ加害傾向尺度（道具的サポートと関係性いじめ加害傾向を除く）の変数間において有意な相関が認められた。

2. 友人サポート、学級機能といじめ加害傾向間の関連

友人サポート、学級機能、及びいじめ加害傾向の 3 潜在変数間の関連をモデル化し、共分散構造分析で検討した。各潜在変数は「友人サポート」、「学級機能」、「いじめ加害傾向」とし、観測変数については、各尺度の下位尺度得点の合計得点を投入した。また、パスはいずれも p 値が 1% 及び 5% 水準で有意となったものを取り上げた。

友人サポートが学級機能を媒介し、いじめ加害傾向に関連するという仮説を設定し、実証的に検討するため、図 1 のモデルを仮定し、共分散構造分析（多母集団同時分析）を行った（図 2）。その結果、 $\chi^2 = 66.054$, $df = .42$, $p < .001$, $GFI = .939$, $AGFI = .895$, $RMSEA = .049$ であり、男女ともすべてのパスが繋がった。な

お、男女間での比較を行ったところ、有意に異なるパスはみられず、モデルの適合度は良好であった。

IV. 考察

本研究では、友人サポートが学級機能を媒介し、いじめ加害傾向に関連するという仮説を設定し、実証的に検討することを目的とした。

尺度間の関連については、男子では友人サポート尺度と学級機能尺度、学級機能尺度といじめ加害傾向尺度の変数間において有意な相関が認められたが、友人サポート尺度といじめ加害傾向尺度の変数間においては有意な相関が認められなかった。しかし、女子では、友人サポート尺度と学級機能尺度学級機能尺度といじめ加害傾向尺度、友人サポート尺度といじめ加害傾向尺度の変数間において有意な相関が認められた。

男子の友人サポートといじめ加害傾向に関連がなかったことについて、女子の仲間集団は情緒的な繋がりが重視され、比較的少人数で固定化した仲間集団を形成しやすいのに対し、男子は遊びや活動を中心とした比較的大きな集団を形成することが明らかにされており（石田²⁹、石田・小島³⁰）、男子では情緒的なサポート等の友人サポートは直接的にいじめ加害傾向に関連せず、集団凝集性等の学級機能がいじめ加害傾向に関連を示したと考えられる。

このように相関分析では、男女間で異なる結果となった。そこで、友人サポート、学級機能およびいじめ加害傾向についての関連をより詳細に検討するために共分散構造分析を行った。その結果、友人サポートが学級機能を媒介しいじめ加害傾向の抑制に関連するモデルが示された。これは、図 1 の友人サポートが学級機能を媒介しいじめ加害傾向に関連するという本研究の分析枠組みを支持するものであり、本研究の目的を実証できたとと言える。また、中原¹²⁾、



木下¹³⁾、小嶋ら¹⁵⁾の受容的な友人サポートが所属感・有能感などの学級機能に関連するという結果を支持している。これらのことを踏まえると、女子は男子と比較すると、親密性が高く、排他的で固定的な小規模の仲間集団を形成しやすいことが示されており(三島²⁷⁾²⁸⁾、仲間はずれなどの関係性いじめの加害傾向が強まる恐れがあることが示唆され、過度な集団凝集性の形成には注意が必要である。

また、男女共に友人サポートは学級機能を媒介していじめ加害傾向に関連した。つまり、いじめ加害傾向に対する友人サポートの影響は男女共に間接的に影響を与えることが示された。これは、相関分析では明らかに示されなかった男子における友人サポートの影響が、共分散構造分析によって間接的な影響として捉えることが出来たといえる。

本研究では、集団要因である友人サポートと学級機能が個人要因であるいじめ加害傾向にどのように関連するのかについて、集団要因である友人サポートが学級機能を媒介し、個人要因であるいじめ加害傾向を抑制する可能性があるということを示すことができた。また、いじめ加害傾向を抑制するためには、友人サポートの活性化と学級機能の向上が重要な要因であり、集団的な視点がいじめ加害傾向の抑制には重要であると考えられる。

本研究の結果は、学級内でのいじめ加害傾向を抑制するメカニズムにおいて、友人サポートを高めることによって、学級機能が高まり、いじめ加害傾向が抑制され、いじめ場面を構成する加害者、被害者、観衆、傍観者の4者のいずれにもならない可能性の一つの要因を提示できたことは成果であると言える。

今後の課題

本研究は、実際の学校現場での調査であり、より現実的なデータを分析できたことは今後の

いじめ研究の発展に貢献できる知見を提供できたと言える。しかし、限界点もある。第1に、同学年の他学級の児童や他学年の児童などの学級外で起こるいじめ加害傾向との関連については捉えていない点である。第2に、いじめ加害傾向は行動予測であり、児童の実態とは異なる可能性が考えられる。そこで、過去のいじめ経験や実際のいじめ加害行動についても検討することは有用であると考えられる。第3に、本研究は縦断的研究ではなく、一時点のデータを扱った横断的研究のため、変数間の因果関係までを明確に結論付けることはできない。第4に、本研究で取り上げた要因によるいじめ加害傾向の説明率は.12～.28であり決して高いとはいえない。その一つの要因としては、いじめ加害傾向を抑制する要因として友人サポートや学級機能のように集団要因に限定したことにある。いじめに関わる児童の個人要因(共感性、道徳性、同調性など)についても併せて今後検討していく必要がある。

引用文献

- 1) 文部科学省 2013 いじめ防止対策推進法の公布について(通知)
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1337219.htm) (2017年6月5日)
- 2) 中井大介・庄司一子・清水一彦 2007 小学生・中学生のいじめ経験と不登校傾向の関連 日本教育心理学会総会発表論文集, 49, 396.
- 3) 三島浩路 2008 小学校高学年で親しい友人から受けた「いじめ」の長期的な影響—高校生を対象にした調査結果から— 実験社会心理学研究, 47, 91-104.
- 4) 原田宗忠 2016 いじめの加害に関する要因—いじめの被害経験, 自己像の不安定



- さ, 自尊感情の高さに着目して— 心理臨床学研究, 34, 390-400.
- 5) 熊谷隼・杉山憲司 2007 いじめ・いじめられ経験と仮想的有能感・自尊感情の関連性 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 16, 166-167.
 - 6) 森田洋司・清永賢二 1986 「いじめ」室の病い. 金子書房.
 - 7) 国立教育政策研究所 2010 いじめ追跡調査 2007-2009 いじめ Q&A
(<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/shien shiryoutu/3.pdf>) (2017年6月20日)
 - 8) 国立教育政策研究所 2013 いじめ追跡調査 2010-2012 いじめ Q&A
(http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/2507sien/ijime_research-2010-2012.pdf) (2017年6月20日)
 - 9) 平岩幹男 1999 アンケート調査による小中学生におけるいじめの実態調査と精神保健学的検討. 東京女子医科大学雑誌, 69, 616-636.
 - 10) 小川一夫 2001 改訂版社会心理学用語辞典北大路書房 127-128.
 - 11) 松崎学 2006 学級機能尺度の作成と3学期間の因子構造の変化. 山形大学教職・教育実践研究, 1, 29-38.
 - 12) 中原睦美 2002 受信が著しく遅延した重症局所進行患者の心理社会的背景の検討—依存の在り方と居場所感をめぐって—. 心理臨床学研究, 20, 52-63.
 - 13) 木下智彰 2013 児童の心の居場所をつくる教育実践の検討. 奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」, 5, 31-40.
 - 14) 越良子 2012 学級コミュニティ感覚と学級内相互作用の関連 —ソーシャルサポートを指標として—. 上越教育大学研究紀要, 31, 75-82.
 - 15) 小嶋秀夫・宮川充司・佐藤朗子 1997 小学生のソーシャルサポートの構造と機能(4) 日本教育心理学会総会発表論文, 39, 78.
 - 16) 森田洋司・秦政春・若井弥一・滝充・星野周弘 1999 日本のいじめ—予防・対応に生かすデータ集. 金子書房
 - 17) 池島徳大 2010 集団の共同性意識の再構築とピア・サポート. 奈良教育大学教職大学院研究紀要, 2, 31-42.
 - 18) 杉森伸吉 2012 いじめと教師のリーダーシップの関係
(<http://www.blog.crn.or.jp/report/02/1540.html>) (2017年12月5日)
 - 19) 本間友巳 2012 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応. 教育心理学研究, 51, 390-400.
 - 20) 戸田有一 1997 教育学部学生はいじめ・いじめられ経験といじめに対する意識. 鳥取大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 6, 19-28.
 - 21) 細田絢・田島誠一 2009 中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究. 教育心理学研究, 57, 309-323.
 - 22) 久米瑛莉乃・田中宏二 2016 友人サポート, 学級機能, 学級適応感及びいじめ加害傾向の因子構造の検討. 広島文化学園大学学芸学部紀要, 6, 21-28.
 - 23) 岡安孝弘・由地多恵子・高山巖 1998 児童用メンタルヘルス・チェックリスト(簡易版)の作成とその実践的利用. 宮崎大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 5, 27-41.



- 24) 嶋田洋徳 1998 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究． 風間書房
- 25) 大西彩子・吉田俊和 2010 いじめの個人内生起メカニズム—集団規範の影響に着目して—． 実験社会心理学研究, 49, 111-121.
- 26) 池田謙一・唐沢穰・工藤 恵理子・村本由紀子 2010 社会心理学 (New Liberal Arts Selection). 有斐閣
- 27) 三島浩路 2003 小学校高学年のインフォーマル集団の排他性に関する研究． 生徒指導研究, 15, 51-56.
- 28) 三島浩路 2004 友人関係における親密性と排他性—排他性に関する問題を中心に—．名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 51, 223-231.
- 29) 石田靖彦 2002 面接法を用いた集団構造の把握—ソシオメトリック・データとの比較による信頼性・妥当性の検討—． 愛知教育大学研究報告, 51, 93-100.
- 30) 石田靖彦・小島文 2009 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団のかかわりとの関連—仲間集団の形成・所属動機という観点から—． 愛知教育大学研究報告, 58, 107-113.

付記

本研究は広島文化学園大学大学院の研究倫理委員会で承認を得て実施された。本研究の一部は日本教育心理学会第57回総会(2015年)にて発表した。論文の作成にあたり，調査にご協力頂きました小学校の先生および児童の皆様に感謝致します。



Correlations among support from friends, class functions, and the tendency to bully
in elementary school students

Erino Kume , Koji Tanaka and Midori Hashimoto

Correlations among support from friends, class functions, and the tendency to bully were empirically examined based on the hypothesis that support from friends would be correlated with bullying tendencies, mediated by class functions. A questionnaire consisting of the Support from Friends Scale, Class Functions Scale, and Bullying Tendency Scale was administered to fifth- and sixth-grade elementary school students (N=242; 134 boys and 108 girls). Covariance structure analysis was conducted through modeling correlations among the three latent variables, i.e. support from friends, class functions, and bullying tendencies. The results indicated that support from friends was correlated with bullying tendencies, mediated by class functions. It was considered important to activate support from friends and facilitate effective class functions for suppressing bullying tendencies. Future studies should examine casual relationships among three variables in detail by longitude studies.